



# Instant Stories 3

---

---

閑古鳥あくた

---

「これでっ、終わりィ！」

弱点を正確に射抜く一撃で、洞窟の出口をふさいでいた巨大なドラゴンを仕留めた。

「死ぬかと思ったぁ」

巨大な龍の身体が崩れ落ちる音を聞きながら、その場にへたり込む。

これで終わりなはず。

後は"ゆうしゃはたからばこをみつけた！"的なウハウハ展開が待ってるはずなんだ。

けど、何かも一早く宿屋帰って泥みたいに眠りたいわ・・・。

「んげっ！ 嘘やろお！？」

早くも夢の国に旅立とうとしていたウチの意識を引き戻す光が、取り落としていた短剣から発せられた。

ドラゴンの鱗を突き通す魔法の短剣は、その怪物の発する異常なエネルギーに反応する。つまり。

未だ、戦闘は終わっていない、ということ。

「こっちはもうすぐライフゼロや言うねんアホんだらぁ！ 変身するなんぞ反則やろが！」  
傷ついた身体を変形させつつある怪物に向けて罵詈雑言を放つ。

「ボスの変身中は空気を乱さないのが勇者でしょ！？」

一瞬で人間の形に変貌を遂げたドラゴンは、どうやら雌だったらしい。

「やっかましい！ ウチはただの宝探し屋や！ 空気なんぞ読めるかボケ！」

「口が減らないわねこの人間！ 叩き潰すわよ！？」

「そっちこそ"さあ かいふくしてやろう"とか何とか言うて、全力全開のウチと勝負せえ！」

「どこで知ったそんな言葉！？」

一通りツッコミを返してから、鱗の時と同じ青色の服に身を包んだおばはんは、

「・・・それもそうね。消耗した人間の魔力なんか食べてもおいしくないわ」  
などとほざいて杖を回転させる。

白い輝きに包まれたウチの身体は、一瞬にして健康体に戻っていた。

「さすがやね、グルメのおばはん！」

「おばはん言うな！ おねえさんと呼ベッ！」

レンタル品の短剣を構え直すと同時に、おばはんは床面を爪でえぐりこむ。

襲い来る衝撃波を連続バック転で回避。今のウチ、めっちゃかっこええ！

「『降れ』！」

おばはんの大音声が響く。

長ったらしい呪文も唱えない"命令"で、洞窟の天井を覆っていた鍾乳石が雨みたいに降ってきた！

「ちょおっ！ ちょ、危ないやんけおばはん！」

「ふーんだ。龍の辞書に手加減の言葉はないのよ」

青く長い髪を解き、鋭い犬歯を覗かせる唇を笑いの形にする。

「やから嫌いやねん、ハイレベルのバケモンは！」

鍾乳石を潜り抜け弾き返し、おばはんに急接近。

感触。

通ったか！？

「ふふふ、早いねーゲームオーバーも」

ウチの身体を絡め取った氷の網ごと、ドラゴンは冷酷な爪を振り下ろした……。

「……はっ！？ ここはどこや！」

「人間の町。宿屋、だったかしら」

「ウチはどうなった、何で生きてンねん！」

薄く塗った口紅と同じ紫色の目で、ドラゴンのおばはんは笑う。

「敵の気まぐれで救われるなんて、情けない勇者よねえ」

「ウチは宝探し屋やて……」

「その宝探してのに興味出てね。だから"かいふくして"あげたのよん」

「げ！？ じゃあついて来るんか！？」

「拒否権があると思うか、勇者よ！」

「ウチは宝探し屋やあ！」

洞窟を踏破して死に掛けたあげく、ウチはとんでもないお宝をゲットしてしまっただらしかった。

「ゆうしゃは たからばこをみつけた！」

「やかましいわ！」

……何でこうなるの。

見渡す限りの平原は今まさしく麦穂に覆われ、秋風が穏やかに渡っている。

その風音に重なって、もっとも似つかわしくない音が響いた。

進軍ラッパである。

稲妻の如き速攻でもって小高い丘を占めた、黒尽くめの軍勢。

それに対し、地の利を制されつつも見事な布陣と戦術を以って同等の兵力を保持している、白き鎧に身を固めた軍団。

戦線は長らくこう着状態にあった。

その状況の中、相手方を攻めあぐねていた黒の軍勢が再び進軍を始めたのには、大きな理由があった。

「皆々、恐れる事はない！ 我が黒騎士団の力・・・見せてくれようぞ！」

国内の反乱をわずかな兵力で鎮圧した女王が、奇跡的な行軍をもって戦線に復帰したのである。飾り気のない宵色のドレスに細い身を包み、精鋭中の精鋭たる近衛騎士隊を凜と率いるその姿の美しさたるや。

「女王、先陣は我等に！ 宙を縫い飛ぶ魔の駿馬にて敵陣を乱してご覧に入れる！」

「うむ・・・そなたらに任せる。だが無理はするな、不利と見れば疾う退くべし」

心酔に近い忠誠を誓う騎士部隊に笑みを贈り、黒の女王は槍を構える兵の指揮者それぞれに激励の言葉をかけてゆく。

強さ、賢さ、細やかさ。どれを取っても不足のない女王は、不敵なまでに微笑んだ。

「今日こそは」

他方、わずかな遅れのために低地へ陣を張らざるを得なかった、白き軍勢。その陣地。

「ええい、奴が戻ったか！ 騎士隊は何をして居る！？」

平生の好々爺ぶりはどこへやら、白の甲冑に身を包んだ王はもはや苛立ちを隠していない。

「父王・・・どうぞ冷静に」

「わしは冷静そのものだ！」

「そう言う事言う奴が一番苛立ってんだよ、わかんねえか腐れ親父！」

愛らしくすらある容貌に怒りを浮かべ、蓮っ葉な言葉で父王をたしなめるのは、国の民に花と愛され慕われる可憐なる姫君。

戦時は魔法戦士として騎士団の先頭に立つその姿は、無意識のうちにも兵の志気を高揚させる。

「姫様、ご号令あれ。騎士たちが時間を稼いでくれたおかげで、魔導師部隊がそろっておりますれば」

「へえ・・・あの気まぐれどもがね」

「姫様？」

「ああ、気にしなくてよろしい。では・・・出撃といたしましょう。王、落ち着かれましたら“念話”にて指揮を」

王は憮然とひげを触りつつ、美しく勇猛な娘に問う。

「お前はどうするのだ」

もちろん、と言葉を切り、剣を掲げて宣言する。

「今日こそは！」

期せずして。

両陣営の先頭に立つ美しき戦姫ふたりの言葉は、唱和していた。

「今日こそはシロクロはっきりつけてやる！」

「・・・なーんてね」

「落ちが弱いかな・・・設定が壮大なのに尻切れトンボな感じ、六十点ね。ちなみにチェックメイト」

「うわ、またかぁ！ 賭けチェス強いね」

「金銭は取らないよん」

「代わりにおやつ、でしょ。今日は何が良いわけ？」

「焼きマシュマロ。ミディアムレアで頼むよ」

知るか、と返したラノベ作家志望の友達が席を立つ。いつもの息抜きのチェスに勝利して、私は笑みを浮かべた。

「いつまで冷静な評価が出来ますやらね？」

白と黒のクィーンをぶつからせる。

楽しそうに戦う姿が、見えた気がした。

「小娘風情が、なかなか手こずらせおる！」

「貴様には言われたくないものだな、トカゲ王！」

互いの武器を振るいながら、緑色の鱗で全身を覆った巨漢と少女は啖呵を切りあう。

「余は蜥蜴に非ず、蟲けらごときに狩らる首級は持たぬわ！」

事実、巨漢はトカゲでなく、龍の血を色濃く引き継いだ亜人種を統べる王であった。その体躯、その身分にふさわしい巨大な太刀を撃ち降ろす。

「失敬な」

露骨な舌打ちをして見せた少女は、春の花の色をしたローブを翻して跳躍した。

巨体に似合わぬ素早さは血のなせる業か、龍人の王はその動きを正確に追って攻め続ける。

「命賭し挑む者、それをして小さき身と侮る輩・・・笑わせてくれる」

王の居室を飾る華美な美術品の間を軽く軽く跳び回りながら、娘は笑った。年の頃に似合わぬ表情と声の冷たさは、刃そのものである。

上下左右、あらゆる方向から響く嘲笑に、龍の王は血相を変えた。

「おのれ！」

「ふ、ふふ。血の上った太刀など当たらんよ」

言葉通り、龍王の太刀に伝わる感触は薄い。生肉を用いた、傀儡の分身だ。

娘の一族は珍しい血を持つ。

魔力を得、人に化けた蟲が人と血を交えて生まれた、亜人種が忌み嫌う魔性の血統。

「忌々しい蟲めが！ 問うてやろう、貴様はどここの女だ！」

いつの間に乗ったものか。

応えは王の鼻先から聞こえた。

「・・・花蠅螂」

花のように笑い、瞬時に剣を捨て、右腕を振るう。

手刀は鎌の鋭さを得て龍王の眼を抉り取った。

絶叫が空気を裂く。

「トカゲの首など欲しゅうもない。つまらぬ仕事であったわ」

ついでとばかりに両腕の腱を断ち切り両膝を砕く。

そうして巨躯を駆け下りた娘は、軽い跳躍で龍王の居城を立ち去った。

五日後。

「ありがとうございました！」

「斬って礼を言われるとは。・・・泣くのは止せ、龍族の男は猛く勇ましい。そうある努力をするのだな」

蠅螂の血の娘は、涙ぐんで礼を言い続ける青年を、手を振って制する。

圧制を強いていた龍王は、その誇りたる巨躯と武勇を失い、国主の座を退いた。

「はい・・・！ 良い国として見せます、美しきご婦人！ その暁には我が城へ・・・！」  
新しく選ばれた若き王の言葉で、娘は思わず吹き出した。

「貴様は私を幾つと思うている」

「は？」

花蠅螂の一族は、美しさを死ぬまで保持する。そして、桁外れの長命である。

「当年取って800と21だ。はて、少々釣り合いが取れんようだな？」

「・・・」

「ふ、ふふ。良き男となれ、若造。貴様の妃の顔を見になら、いずれ城へ参るとしよう」  
赤面して深く一礼する龍族の若者に、娘は花の如き笑みを贈った。

くいつ。くいつ。くいつ。

細い指にしっかり掴まれた小粋な杯は、先ほどから一定のペースで往復を繰り返している。

「ねえ、ちょっと」

くいつ。

「飲みすぎじゃありませんか？ 身体悪うしますえ、止めときなんし」

文句も言わず酌を続けていた西方出身の遊女は、さすがにと言った調子で上客を諫める。

「ふむ。言われてみればその通り・・・か」

遊女はほっと息をついて、何よりも酒を好む客のために料理を運ばせる。

香ばしく焼けた塩魚、客の好みで軽く炙られた薄切りの牛肉、タケノコと木の芽の和え物、豆腐と鶏肉を使った汁物。

金払いのいい美しい客への、料理師の敬意が表れた膳であった。

「馳走になる」

「たんとおあがりやす」

客・・・金の髪の娘は華奢な見かけどおりの小食で、じっくりと味わいつつ箸を進める。

「美味」

「おおきに」

概ね静かに、時折言葉を紡いでは味覚を研ぎ澄ますこの娘の所作が、遊女はとても気に入っている。

「弟子を、な。取ろうと思っている」

「お弟子さん？ ええですなあ、どんな方ですのん？」

「半狼の娘だ。貧民街の」

遊女は、別段驚いた様子も見せずに「お客さんらしいですなあ」と頷く。

「・・・どういう意味だかな」

おかしように喉を鳴らす。娘も、おおらかな遊女の立ち振る舞いを気に入っているようだった。

ふと、箸を置く。小さな舌打ちは、途中でそうせねばならぬことへの僅かな抵抗であった。

「あらあ、またですのん？ 近ごろは物騒ですなあ、怖い怖い」

「心配するな。お前の手は煩わせんさ。隠れているといい」

立ち上がり障子を開け、鋭く「出て来い」と告げる。

果たして、美しい借景の庭に黒装束の集団が姿を現した。

十と六、少し多い。

料理屋と宿場を兼ねる店構えはかなり豪奢であり、必然、この種の手合いも狙いを定めやすい。

「大人しくするなら命は取らん。そうでないなら」

鋭い八重歯を見せて、娘は笑った。深紅の瞳が燐光をまとう。

「責任は取らんぞ？」

気圧されたように奇声を上げ、賊の一人が娘へ踊りかかる。娘は瞬時に抜刀し、一刀で斬り伏

せた。

「武士道も何もあるまい・・・掛かって来い！」

甘い匂いのする息を吐き散らし、十五人が一斉に武器を構える。半ば理性をなくしているのは薬のせいではない。

娘の、毒蜘蛛の力に魅せられたためだ。

「やれやれ、麻葉の魔薬ごときに。同じ蝕まれるならば、旨き酒がよかろうにな・・・」  
あまり良い見世物ではないがとぼやいてから、低い詠唱を短くこなす。

巨大な蜘蛛の刺青が占める柔肌を晒した娘に、獣と化した十五の影が躍りかかった。

「・・・残念だったな」

が、一糸まとわぬ体躯はすでにそこに在らず。賊どもはことごとく蜘蛛の糸に絡め取られていた。

「もう少し、頂くか」

何事もなかったように障子を閉め、着物をふわりと纏って、娘は膳の前に腰を下ろす。

「ちょっと待ちなんし」

遊女が嬉しげな笑みをたたえてふすまを開け、

「捕り物のお礼ですえ」

黄金色に輝く食物をどっさりと載せた竹ざるを、膳の横に置いた。

「うむ・・・遠慮なく、馳走になる！」

シソの葉、蓮根、鰻、馬鈴薯、海老、茄子、タンポポの葉。

白い頬を緩ませた天ぷらの盛り合わせは、常連客にしか出されない逸品。

いずれ弟子も連れてこようと小さく誓いつつ、娘は大好物にかじり付いた。

「ふむ・・・よく成っているな。今日は茄子づくしだ」

「師匠、茄子ってどんな食べ物ですか？」

作務衣をまとった金髪の女剣士へ、その弟子の娘が問いかける。本人は真剣そのものである。

「見れば分かる」

「また出た、師匠の口癖！」

「ふ、よく見ているものだな」

「一月も経つんですから、慣れますって」

にとつと犬歯を見せて笑う半狼（ハーフウォルフ）の少女は、館へ来た当初よりも毛艶のよくなった耳を嬉しげにぴんと立てた。

「己の目で見、己の耳で聞き、己の手で触れる。何かを学ぶには・・・こと畑をするにかけてはそれが一番良い」

「そういうもんですか？ あたしは師匠とお話するのが、楽しいんですけど」

「異な事を。あの花蠅螂（かまきり）の娘以来だな、そんなことを言う奴は」  
くくっと喉を鳴らしてから袖をまくり、小柄な背を折って腰をかがめる。

小さな音と共に茄子の実をもぎ、藤籠に投げ入れる。

「あたしもー！」

「食べ物相手だ、手加減をするのだぞ。教えたとおりだ」

「はい！ よいしょ・・・っと」

師に倣って腰をかがめ、手の爪を少し伸ばして茄子を切り取った。

「わ、きれいな紫！ これが茄子・・・」

おおお・・・とため息混じりに声を上げる弟子を、金髪の剣士は目を細めて眺めている。

「どのくらいとったらいい？」

「この辺りは植え替えをする。全部採ってよい」

「っしゃー！ 燃えるぜ〜！」

貧民街での暮らしが長く、兄弟姉妹のお下がりを着、残り物で腹を膨らませてきただけに。

否...性格がそうなのだろう、この半狼は食べ物に目が無い。

蜘蛛の血を持つ剣士は、それを見越して畑や生け簀、狩場をも増やしたのだ。

甲斐があったなと静かに呟いて、汗で貼り付いた金の前髪を払う。

彼女がじっくりと、半狼がばたばたと仕事を進めること三十分。

「首尾はどうだ」

「上々！ やっぱ何事も先手必勝だよねえー、むふふ」

「ここならば先を争うこともないと、いつも言っているだろうに」

「そうは言うがな師匠」

「・・・ふふ。先を制するは剣士の常道、悪いことではないさ」

半狼の娘は「そうでしょうとも」と鼻を高くして、

「で、で、これどうやって食べるの？」

「まあ、急ぐでない。私が腕によりをかけて調べよう。手伝ってくれるな？」

「はい！」

東国の服の袖をたすきでからげ、茄子を捌きにかかる。

「・・・胡麻油で一度揚げ、味をつけて煮る」

「ざっくりと切ってたっぷりの塩で揉む！ もみもみ・・・クセになりそう」

茄子の揚げ煮、即席漬け。

「やめい。さて、椀物も仕上がった。次は・・・味噌を取ってくれ」

「はいお味噌ー。こっちはどうすんの？」

「うむ。そっちは適当に切っておいてくれ、後で揚げる」

「わかりましたー！」

味噌汁、田楽、天ぷら、エトセトラ、エトセトラ。

「・・・やはり二人だと早いな」

「でっしょー！？ ナイスアシスト、あたし！」

「うむ。ようやってくれたな。・・・頂くとしよう」

「いただきまーす！」時折言葉を交わしつつの夕食が何をもたらしただのか、蜘蛛の力を持つ娘は思っていた。

「...食い終わったら、奴に文を出してみるか」

「え、何なに？ 何企んでんの？」

己の友との出会いは、この娘に何をもたらすだろうか、と。

「海辺にゴスロリってどうよ、幾ら何でも」

「日光嫌いなの一っ！　しょうがないの一」

「・・・はあ」

ぶんすかと開き直す少女の態度に、あたしはツッコミを早々と諦めた。

「ねえー、お腹すいた！　今日の“めし”なあに？」

「今日はトマトのいいのがありますよ、お嬢さん」

わーいと喜ぶ少女にトマトを手渡す。

魔物用に調整された果実はとろけるように甘く、その赤色は魔力を帯びたように美しい。

大陸の覇を争った魔物と人間が（表面上とはいえ）和解を迎えてから200余年。

一部では平和とも共依存とも言える関係が築かれるまでになっていた。

人間が開拓したりリゾートで魔物がバカンスしたり、人間が魔物の城を訪れたり当たり前になっているのだ。

「まあねー。わたしなんかは未だに蛇蝎の如く嫌われてたりするわけなんですけどお」  
しゃりしゃりとトマトをかじりながら、状況を確認するように少女はため息をついた。

「心が読めたり触るものが全部凍ったり、怪しい薬作ってたりするからじゃない？」

「特技で体質で趣味だもん！　直接の害にはなってない・・・」

感情が動くたびに、紫色の目の輝きがくるくると変わる。同色の燐光が、にじむ涙を隠す。

「悪かった・・・友達だからって、デリカシーなさすぎたね。そうさ、あんたは全然悪くねえさ」

「うん・・・」

あたしは知ってる。

この子が身元を隠して販売する魔法の薬が、人間の病（主に血の道や心臓）にてきめんで大人気なことも。

知ってるさ。

強すぎる魔力に駆られて暴走しないように、いつも無理矢理力を抑えてる事だって。

それでも、この子は嫌われる。戦争の時に圧倒的な力を誇った魔物の落とし子だから、それだけの理由でだ。

言葉は町を駆け巡るうちに魔力さえ持ち、噂となって人間の心を占め、考えを狭める。

何にも悪くねえ奴らが我慢ばかりしてる。

悔しくてしょうがないけれど、あたしはそれを変える力を持たない。

「ね、ね。今日も、遊んでくれる？」

「もちろん。沖に無人島があるから、そこで思い切り遊ぼう」

「やったあ！」

少女は手を掲げる。芝居の場面が変わるように、あたし達は無人島の洞窟の中に立っていた。

「・・・・・・・・あたしも泳ぎたかった」

「泳げるよ。ここ、水脈走りまくってるし、脆そうだし。・・・ぶっ壊しちゃってもいいんでしょう!？」

紫の目がざらりと輝き、ピアノでも弾くように白い指が宙を踊る。

馬鹿でかい魔法陣が多重に起動して、ものすごい重力が身体にのしかかってきた。

「ばっか...あたしが、壊れる・・・だろーがぁぁあ！」

咆哮を上げて腕輪に触れる。モードは・・・この際なんでもよろし!

「おおー、龍人モード引っ張り出せたおー！」

「ちっ。あからさまにはしゃぎやがって！」

頭の角を怒らせ、牙の生えた口で怒鳴り返す。あたしの、人間の体に、龍の特徴が現れている。

理屈は長くなるので割愛するが、あたしはこういう力を持つてる奴なんだよね。

「えっへへえ。遊ぼお！」

「へいへい・・・死なねえように頑張りますよーだ！」

一気に距離を詰めて殴りかかる。

魔力の干渉が起こす輝きに照らされた少女の笑顔は、美しいほどに凶悪だった。

むふふ、いいねえ。これだよこれ。

聞こえるかいお嬢さん? あたしの、魔王の魂の欠片が、震える音が・・・。

「うっめーっ！」

「もう少し、落ち着いて食べられないものですかね・・・全く」

男は眼鏡に手をやりながらため息をつくが、彼の手作り弁当にがつく少年には当然これっぽっちも響かない。

「だってさ、美味いんだもんよ！ マナーも覚えてるけど、先生しか見てないんだからいいじゃん！」

「覚えているならいいんですけどね。騎士団の入団試験ももうすぐなのですから、」

「わーかってるって！・・・ふーっ、ご馳走様でした！」

教師の台詞を最後まで聞くことなく手を合わせ、少年はすっと立ち上がった。

腹ごなししてくると言うが早いか、風を巻いて走り去ってしまう。

「大丈夫なんですかねえ」

男は憂鬱そうにため息をついて、弁当箱を片付けにかかる。

「・・・うまいと分かっているものを目の前にすると、誰でもそーなるんじゃないの？」

「うわあびっくりした！後ろから声かけるの止めてくださいよ、僕はビビりなんですから」

本当に髪の毛を逆立てる勢いの男を見て、彼にそうさせた主犯である少女は快活に破願した。

「あははは！前大戦の英雄も落ち着いたもんだね、ギラついたところが全然ないよ。本当に魔王を半殺しにした戦士？」

「その魔王から力と魂の一端を与えられた貴女には負けますね」

「あたしはちょっと口が上手くて、他人と考え方が違っただけさ。あのオッサンはそこを気に入ってくれたらしいけどね」

強大な力を持つ魔王の長きに渡る支配と激しい闘争を経て、人間と魔物が一応の和解を見た世界。

その表と裏の立役者二人は、和やかに談笑を続ける。

「愉快的人だな。魔王の決断をそんな単純に解釈できてしまうなんて」

「難しいの苦手なんだよ、あたしは。柔らかいベッドと美味しい飯、あとは仲良いグチがいりゃいいんだ」

青年は眼鏡の奥の瞳を細めて、己の手を見つめる。

どれほどの魔物を叩き潰してきただろう。

種族は違えど営みは同じ、家族があり正義があったのだ、彼らとて。

「あの戦いが正しかったなんて、僕には思えない。人間が魔物の、その王の世界を受容できなかったに過ぎない」

「正しくなくなっただっていいじゃん。あんたはあんたの大事なモンを護った。それで充分だろ？」

「そう・・・ですね」

「そうさ。誇れよ、自分を。・・・で、今月のぶんは？」

「できあがっていますよ。貴女も大変ですね」

好きでやってんだよと笑い、少女は移動魔法の光に消えた。

この青年の作ったものを届けて回るのも重要な仕事なのだ。

「傲うべき友の居る僕は、きっと戦っていたときよりも幸せだ」

数多の魔物を倒し魔王を瀕死に追い込んだ戦士は、人と魔物の衣食住を満たすものを作り続けている。

衣服は素朴な優しさあふれるデザインで人気、農作物はどちらにも好評、魔物の生態にすら合わせる建築設計は見事の一言。

この状況で一番と言っているほど必要とされる人間の一人。それが彼だった。

「さて・・・ウチのやんちゃ坊主はどこへ行ったかな」

移動魔法の術式を組み立てながら、青年は晴れやかな心地で呟いた。

ボン！

破裂音と共にフラスコが砕け、黒煙が上がる。白衣の男は、ぼさぼさ頭をせわしなくかきむしった。

「ああもー！ どんっだけ材料無駄にしてンだよくっそおお！」

男は科学者だ。魔法文明華やかなるこの都においては異端の一派であり、パトロンなど望むべくも無い環境で研究を続けている。

タダじゃねーのによ、などとこぼしながら、再びフラスコを取り出して薬を注ぐ。

『ふむ。お前さんは何がしたいのかね？』

「おわ！？ 何だ爺さんかよびっくりさせんな」

『いきなり後ろから声をかけるのはウィザードの特権じゃての』

「ケッ、吹いてろタヌキ！」

年齢が四桁に達していると噂の好々爺は大笑すると、ふと真面目な顔をして呟く。

『なるほどのう。お前さんは』

実験結果が事細かに記された帳面を静かにめくる。

カタツムリの歩みの如き進捗状況だが、老人は即座に看破した。

『お前さんは、人間を作ろうって心算なのじゃな？』

「正解だよ。何でノート見ただけで分かるんだこのバケモノ」

小さく笑った老人は帳面を閉じる。

『・・・ふう』

「倫理がどうこう言うかい、あんたも？」

『否。魔法であれ科学であれ・・・知的好奇心と野心とがその発展を支えてきたのだ。

堅ってエコト抜かすなって話じゃよ』

己の口にした言葉がツボに入ったのか、老人はひげを揺らして爆笑する。

男は頭を掻きつつ、彼なりに思い切った相談を試してみた。

「なあ、爺さん。何か手がかりねえか？」

『そうだの一。お前さんは一から十まで作り出したいんじゃないけど、それはちと難しかろうな。魔法でも無から有は生み出せん』

「げ。俺無駄なことしてたわけ！？

あー、俺の好みドンピシャのどじっ娘メイド作って世話焼かせようと思ってたのによー！」

何と言うか、器の小さい男である。

『意外とダメ人間じゃな』

「うっせーほっとけ」

『まあ、人の夢にケチはつけん。わしも同じこと考えてた時期あったし』

大魔術師の威厳がパーである。

『そこでじゃ』

「あ？」

『わしが資金と魔法技術を提供しよう。お前さんは科学技術をくれ。共同研究といこうではないか。』

生きがい創造、爺さん生き生き。市場も開けて国が潤う。いいことばかりである？』

「いいのかよ。途中で諦めるかもしれねーぜ」

『そんな時やそんな時じゃ。正直、金なんぞどーでもええし。それより、無謀な研究の成果を見たいんじゃないよ』

吹いてろタヌキと悪態をついてから暫く考え、

「分かった。できる限りやってみよう」

男は決意の宿る表情で告げた。

好々爺は笑っているだけだった。

その後。

「爺さん、今度はどうするよ？」

『猫耳は外せんだろ』

「俺は犬耳派だがしょうがねえ、今回は譲ってやらあ」

人体の構成に機械を、人間らしい思考や仕草、戦う力などを持たせるのに魔法を用いた人造の新人類は世界中で大ヒットし、

「やっぱオッドアイだろ」

『ヘテロクロミアもいいぞ』

バカ二人の飽く事なき創造も続いていくのだった。

さて、どうするか。

妙手と奇策と戦略でならず軍師は、その慧眼を前方へ向けて思考を続けていた。

狡知を持つ怪物と手を組み、国を脅かす賊軍。

帝政そのものに不満を持つ者や国の転覆を狙う奸臣、そそのかされて剣を執った貧しき者達。

組織は脆弱だが、装備や数は一国の軍隊とそん色ない一団である。

「ウチの陛下も頑張ってるんだけどなあ。報われねえよな、あの女（ひと）も」  
廃棄された砦と対峙する戦線は、3日目を迎えてなお膠着していた。

一夜にして出現した青銅の壁を前に、である。

「ブロンズの壁、ねえ。一夜でこんなもんブチ上げるなんざ・・・高位魔導師がいやがるか？

厄介だぜ、飛竜騎士団は出払ってンしなあ」

ぶつぶつと愚痴を吐きつつ紫煙をくゆらせる男は、頭に浮かぶいくつかの策を胸中で施策する。

「正面突破・・・バカか。石弓・・・魔法で弾かれる。暗殺部隊・・・陛下の方針で使えん。

あの人怒らすと俺がヤバイんだよなあ」

男は彼が仕える女帝から、無理とも思える難題をつきつけられていた。

「死者を出すな、って酷すぎね？ ったあくウチの陛下ときたら」

彼はやりとげねばならない。

今までもそうしてきたし、賞与も懸かっている。

「しょうがね。切り札出すか・・・あいつらなら何とかすんだろ」

男は小さな笛を取り出し、音高く馴らした。

二時間後。

「任務了解、派手に行きましょうか」

「大暴れじゃ。ワクワクじゃのう」

揃いの真紅の外套を翻して現れたのは、帝国騎士団が抱える二名の問題児。

一人は機械化された馬を駆る弓騎兵、もう一人は年齢不詳の女剣士である。

「加減はしろよ。何分要る？」

「5分。兵を並べておきなさい、速攻で沈めるわよ」

「存分に引っ掻き回してやるでな。怪物どもなら斬ってええんじゃろ」

へいへい、と答える男の声が終わらぬうちに、女騎士は得物のバネを巻き上げる。

「ちょい右じゃ、接着が弱い。2艇構え、一点集中。・・・撃て！」

弓騎士の細い両腕に一艇ずつ構えられたクロスボウが唸る。

銀の矢は壁を守る魔力を撃ち抜き、鋼の矢が突き立つ。

「・・・堅いわね」

鋼の矢を撃ち終えた弓を捨て、騎士は新たな機械弓を構える。6発の銃を速射する特注品だ。

凄まじい音と共に撃ち出された銃が壁にひびを刻み、打ち崩す。

「チッ・・・相変わらずむちゃくちゃだな、テメーらは！」

「最高の誉め言葉ね。さあ軍師さん、号令号令」

ああクソ！ と頭を搔いてから、男は指揮刀を掲げた。

「全軍突撃！ 奴らの背に続け！」

「我らの陛下のために、かの？ くくく」

戦術を台無しにしてくれる圧倒的な強さも、一介の騎士でありながら女帝の寵愛を受ける美しさも。忠誠心の薄さも。

騎士団にとっては大問題である。

「言ってやがれ。テメーらは・・・それでいい」

俺は結構気に入ってたりすんだよな、とぼやいて、軍師はまた頭を搔いた。

「陛下、これマジ？」

「マジならお前はここにいまい」

朝から憂鬱げなため息をつき、若き女帝は腹心兼親友の少女に応じる。

帝位を継いで間もない皇帝には、前政権から山積したままの問題が大きな障壁と化して立ち塞がっている。

その一つが、民間ゴシップ誌を賑わせる話題。

「『先帝のハレムまで継いだ“百合姫”、侍らせる奴隷は増加の一途！ 大丈夫かこの国！？』だとき・・・やれやれ」

「先帝なら容赦なく叩き潰してるでしょうねえ、この雑誌」

「私は親父ほど狭量ではないよ。」

異世界を渡り歩いてきたからな・・・『暴君』は雪ぐべき汚名でしかないのさ、私にとっては」

息と共に言葉を吐き終え、皇帝は椅子を離れる。

「本日は騎士団の訓練視察と国民議会の開会式が予定されております、陛下」

「騎士団は随分技量を上げたと聞く。楽しみだ」

「議会も大事でしょ。私ゃ大変だったんだからね？」

前政権から続く官僚の腐敗を粛清し、現皇帝が推し進める立憲君主への理解を広め、議会が議会として機能するまで昼夜問わず奔走したのは誰だろう、皇帝の眼前で頬を膨らませているこの少女であった。

「お前には感謝している。よくここまで成長してくれた」

自分より少し背の低い少女の髪を、皇帝は優しく撫でる。

照れているうちにかがみこみ、

「跡になってしまったな」

「私の勲章です、陛下」

ゴシップ雑誌の記事には、ふたつ嘘が含まれている。

まず、現帝がハレムを引き継いだとする説。

ハレムは確かに存在し、美女も数多く居た。

が、人々は知らない。

「あの腐れ親父め、男色趣味隠すためだけにハレムなんぞ作りおって」

皇帝の所有物であることを示した刺青は残ったものの、彼に隷属していた者のほとんどは男女の別なく政治家や騎士として重用されている。

そしてもうひとつ。

「移民はどうなっている」

「順調です。悪人ヅラの商人、良い働きしてまっせ」

異民族を強く差別し奴隷制を敷く国から『奴隷輸入』の名目で次々と流入する人々の受け皿づく

りこそが、目下最大の課題なのだ。

報道が真実を語らないのは、どこの世界も同じである。皇帝はそのことを熟知していた。

「政治手法が汚いんスよね、あいつら。新聞屋と組みやがる」

「これ。政敵とはいえ悪し様に言うでない。奴らの主張にも尤もな部分は」

「ないでしょ」

「ないな。まったく、私はそのうち皇帝を降りるっつーのに」

貴族然としたきらびやかな衣装に袖を通しつつ、二人は愚痴をこぼしあう。

「これ重くて嫌なんだよ」

「これじゃ剣も振れやしない。やっぱ儀礼装束簡略化したほうがいいんちゃいます？」

「ジジイどもが拘ってるしなあ。久々に強権発動してくれようか」

「また叩かれますよー」

「うー、頭痛いわもう」

「陛下は頑張っていらっしゃいますよ。貴女の障害はこの手で排除します」

君主の頭を、背伸びした副官が撫でる。

「ああ。期待している」

さて、今般の報道にはひとつだけ真実が含まれているのだが・・・語るだけ野暮、というものであろう。

## あとがきもしくは蛇足

---

ここまでお読みくださったありがたい読者の皆様、こんにちは。もしくは、初めまして。不肖わたくし、閑古鳥あくたでございます。

1600文字以下のお手軽小粒ストーリー集、懲りずに飽きずに第3弾となりました。

今回は世界観を統一し、異世界ファンタジー山盛りでお届けいたします。

一話完結ですが、すべてのお話が同じ線上に並んで動きます。

不肖ながら『シェアードワールド』という物語の構成に強く憧れていまして、そういう話を書けたら幸せだなあ、などと思っていたので・・・。

この場をお借りして実現できましたこと、個人的にとっても嬉しく思っております。

全体としては非常に未熟で、まとめて読むと趣味が分かるというかなんというか、ジャンル偏り過ぎと申しましょうか。

ええと、キリがありませんね。

とにかくにも、昔から大好きな世界観で、思うように物語が展開できた喜びでお腹いっぱいございます。

皆様方の貴重なお時間を拝借するに足る『世界』となっていますことを希望しつつ、乱文を結びたいと思います。

お読みいただきまして、本当にありがとうございました。